

特41

120

洒落用文章

091747-000-7

特41-120

洒落用文章

十返舎 一九/著

M26

DBO-0221



道樂全 洒落用文章序

一 此書の只紙屑籠の目を悦ばしめ看板箱踏邊の口を開せんが爲に作り蓋弘法のいろ

一 四十八文字の備して高野八十の手習子と與ふべきの本手とあるすの依り宛字と

一 附等を専らよ著したるものあり

一 世に行る用文章夥多なりといへども天上へ遣す案文あらびに地獄極樂龍宮鬼が島

一 其外延々華化等遣す文章を記さず尤日用入らざる文言をれば知る人稀あり依て其

一 文章を委くしるす

一 卷中よあらば案文の天道様へ上る年頭狀雨乞の文言をぞ別して知らずんば有

一 先祖の佛にありたるを賀す文幽靈差留の文をぞ随分入用出来るものあれば常々其

一 文例を諸じ置く事肝要ありとの心切あり

一 一手形証文盡を書たる本世にあらまたありと雖と高野六十那替男妾受狀上戸酒の寺



請極樂蓮臺の店受状をのせず茲に其珍らしき又例を載す

一籠頭かごづゑも載せたる文字筆墨紙の由來ゆらいの引証ひんしよ正しく一讀感いちどくかん心をさらぬ力ちからありし又男女合あつちやうご性しやう夢判むめはん斷女たんだん禮式れいしき諸病しよびやう心得こころえ經濟けいぎ便法べんぽうをどの實じつ人ひとの心附こころづざる事ことのみを集めあつ一すひとつした時とき是れを見れば其益そのえき少すくからざる事多し



洒落用文章

目錄

- 天道様へ上る年頭狀
- 日蝕御見舞之文
- 雨乞之文
- 雷神へ頼み狀
- お星様へ宿願之文
- 地震之餘へ遣す文
- 極樂へ遣す添狀
- 佛に成たるを賀す文
- 幽靈差留に遣す文
- 龍宮へ遣す文

- 乙姫病氣見舞之文
- 猩々へ遣す文
- 化物へ遣す文
- 野干之官位を賀す文
- 神誘に遇たる人へ遣す文
- 鼠之嫁入を祝する文
- 六十之廷破を賀す文
- 月夜よ釜を抜し人へ遣す文
- 鳶に油揚を奪し人へ遣す文
- 四國を巡て猿と成たる人を訪ふ文
- 鬼の留守に洗濯を頼み遣す文
- 借金を質に置く文

○木よ餅の生たるを賀す文  
○七福神へ呈するの文

○手形證文之部

○高野八十那智六十男妾請狀  
○上戸酒寺請狀

○極樂蓮臺之店受狀

○風神送手形

○籠頭之部

○文字の由來

○筆の由來

○墨の由來

目錄終

○紙の由來

○名頭字盡

○芝居百官名

○男女台性

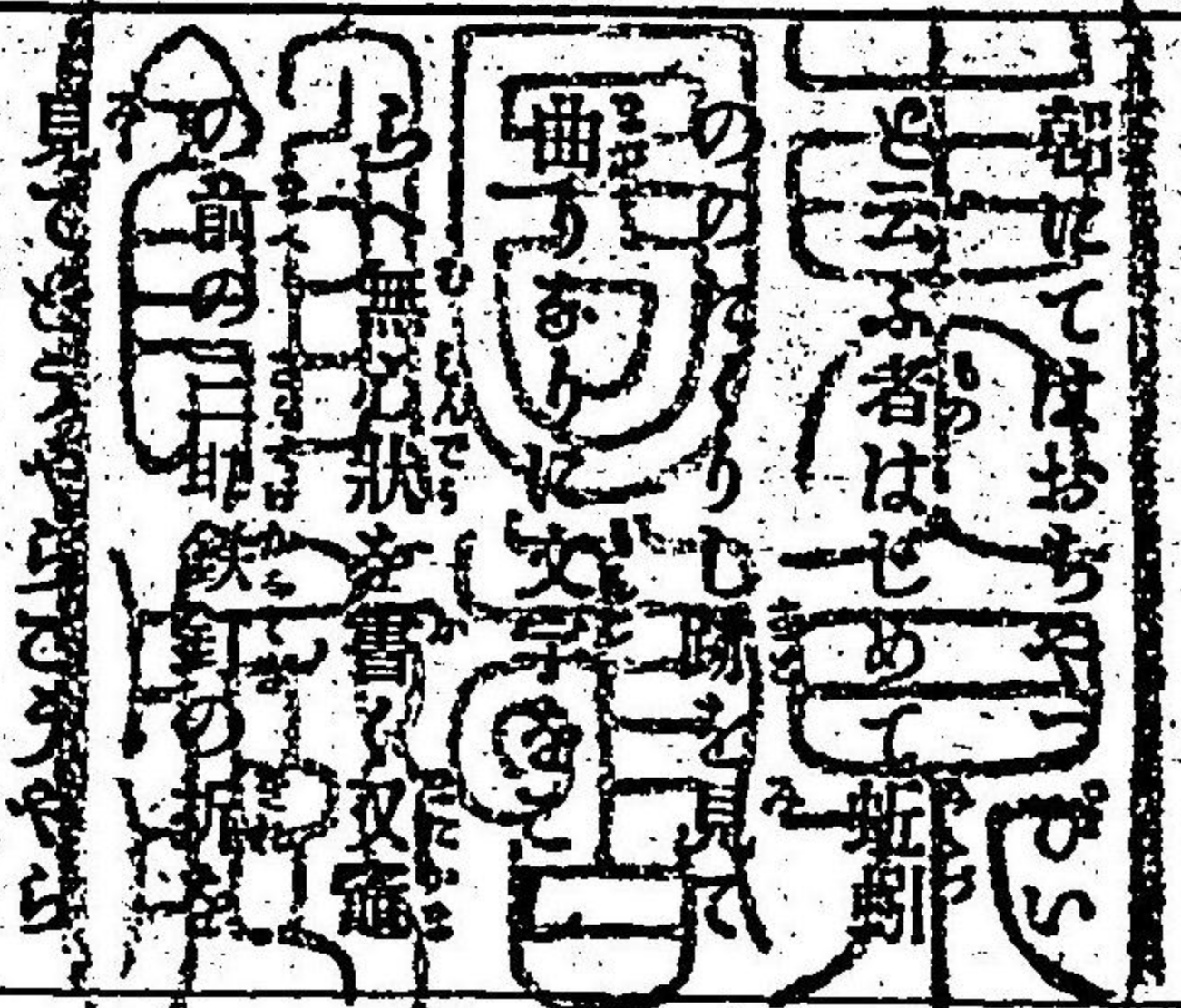
○夢獨判斷

○女禮式

○諸病心得

文字之由來

文字の起原は大唐の蒼頡と云ふ人雁の飛行を見て文字を作り初る我



にじくりはじめしあり

洒落用文章

十返舎一九遺稿

○天道様へ年頭狀

天道之御蔭何方も御照覽羞明奉

存候先以日輪様益御日和能被成

御續洗濯萬事都合宣敷奉千候乾

上而東一折天上之仕候誠下天氣

之御祝詞申上候證迄に御座候猶

期青陽之時候

○日蝕御見舞之文

御天道様日蝕に付賑々御爵陶敷

又或女郎か鹿角菜の行列を見て造りはじめしとも云ふ

筆の由来

筆ハ左甚五郎はじめて製と云へり櫛の木を丸くし長さ四五寸ばかりに切て柄をすげたるものありヲヤ夫ハ筆じやアねへさい槌のことだハイヤ書工真久麻呂が漏歴の時よめるうたに

こゝのまつちの山中  
あればふでよやこと  
かく硯墨ハもたす  
どかくよみてこれにて  
大黒をかきたるふでさ  
り

墨の由来

すみハ池田炭上品なり  
熊野よりいづるもよし  
伊豆駿河よりもおほく  
いづるありヤイへらば  
うめその炭のことじや

可被遊御座と奉察候乍光無程御  
快晴可被遊候條朝日至極に奉存  
候依之近頃無勿体候得共汲立水  
一盥に奉移之候右拜上申度如斯  
御座候

月蝕御見舞之文も同文言あり但し朝日至極を満月之至に御座候と書べし

○雨乞之文

早魃之節に御座候得共天道様倍々御機嫌能過候而毎日御照附被成迷惑至極奉存候干上而下界皆

々相障儀有之候乍憚御安心被下  
間敷候誠に此節者雨降不申世界  
一統首を日照罷有水切にて鯉附  
迄も鱧之様子御座候依之甚申  
上兼候得共何卒一雨御無心中上  
度定て御都合も悪敷可有御座候  
得共何分時雨にて御差繰被下  
少々御夕立可被下候勿論外は田  
作仕候方も無之候故無據雨乞仕  
候尤早速天拜可仕候間いづれと  
も御天道可被下相待罷在候

アねへはする墨のこと  
たハアするすみのこと  
かそんちら

梶原源太にわたづね

かす

白すみの焼ぬむかし神  
野友恵がこしらへたる  
物にて雪の枝と見ゆる  
をよしとす

紙の由來

紙ハ唐土にてハ竹を割  
あかのあまはたきとり

紙にすくさり我朝にて  
のみやこ紙屋川にて初  
て紙をすく又東都の吉  
原にハ毎年七月十三日  
にかみをすくあり  
うたよ

くしびきやうだい  
取そろへ

とあるハすあハちかみ  
すきのうたあり

名頭字盡

奇妙朝禮鑑

○雷へたのみ状

白雨の節不相替御鳴被成常住奉  
線香候光ハ御子息様御事昨日初  
て御轉付被成候處折節雲切有之  
御落被成候由奉吃驚候此上共臍  
外ハ格別私宅へハ御雷光被下間  
敷桑原々々御頼申上候因茲節分  
之豆一袋指上申候聊御咒之驗迄  
に御座候

○於星様へ宿願之文

益御光能御照被成明く奉存候然

者下拙儀金銀星澤山一星く御座  
候願望一付お星様方へ御神酒壹  
對天上之仕候誠ハ七夕相願候儀  
北斗御勘考被成降可光様御守被  
下度奉下界上候

○地震の餘へ遺す文

昨日は地震御搖懸被成定に激々  
にて目に逢奉恟候乍去震復し御  
輕被成下膳椀擾あさ仕合奉存候  
依之餘かあ一折奉押瓢箪候右御  
禮如此御座候



賀如來保宇 伊天茂君內 尾羅我隣之 緒長鶯馬場 和齒仁本 荷葉久呂 附而名寺江 參手本尊樣 尾波尻目仁 一守是佐和 尙佐牟何賀

何迄坊主手 井奈左留還 俗志那佐井 奴仁成多良 於前毛餘程 色取男田何 楚戶骨加良 極太帆宇

芝居百官名

關白 王座近く粗忽

中人にある役あり

左大臣 四海を握らん 底較計

給かまはあまごかきの地ぐりあり 願尊よ押へ奉り候 どの高覽は備へ奉り候といふ地ぐりあり 都て地震の 所へ遣る手紙に地ぐり第一に書く事古例あり

○極樂へ遣は添状

往生人有之任幸便一棺指送申候 先以佛様方倍御殊勝に被成御座 奉信仰候死は今度私懇意之亡者 一人差遣申候尤此者行倒首縊に ても無之病死に紛無之候間何卒 極樂よて御世話被下度勿論後々 法事供養等相勤候施主人も急度

有之候て中々無縁法界之者にも 無之候間吳々も宜敷頼上候此段 私以參御頼可申上候處未定業不 盡存命に罷在不能其儀候死後早 速葬禮可申上候

是は先立候一家親類或ハ懇意の者あぞ佛と相成居候 者の方へ願遣す添状あり地獄へ遣す添状も此趣 あり

○同返事

此度亡者被參候に付御經之趣委 細臺讀誦候被入御年忌候御事隨

ある人

右大臣 信義正しき文  
者の相

大學 後室の里の子  
二枚目の御

彈正 後室と心を合  
せる爺の名

いつでも

右馬允 若殿の名初め  
馬鹿殿よて後

平馬 赤面の敵役心  
切よ悪人の肩

瀧口 大序にあはた  
いしく申上り

を持つ役也

將監 かつてもよぼ  
けた親爺の名

帯刀 序切のたては  
いつても此人

典膳 彈正と平馬と  
の間

大膳 相談合手とあ  
り常に奸佞邪智を以て

小刀細工をする人

數馬 師匠の兄勘當  
する役

右門 免角勘當をさ  
れる人

分比方にて箔代之建立等も爲致  
衆生之處へ佛にも相成候様可致  
右貴僧如斯御座候

是は何故是は計り返書があると思ひまするふが難し  
も極樂へ逝て居る時婆娑から此手紙が来まいもので  
も亦し其時の爲に此返事の下書を記して置のありお  
天道様や雷への書狀に返事の案文を書さるゝ夫ハ又  
彼方の手合の事故天ぢよくの書肆に案文の本が有り  
そふあものあり

○同佛に成たるを賀す文  
益御蓮臺に被成御居仰様に被成

御成候之由精進之至御座候依  
之檜の花三文奉手向之候聊御佛  
參之驗迄は御座候

○同返事

御施餓鬼被下致拜誦候御揃今以  
御達者之由恨敷存候隨而西方皆  
々賽の河原儀も無之候間御安置  
可被成候且我等儀御先祖秋月妙  
光信士様御世話に以地獄で佛  
相成候條御經木可被下候右御吊  
として檜唯三文御手向被成吝嗇

主 膳一寸裁判の出

集 人二枚目の敵に

士 亦がら刀を鹿末にす

主 水 始終扇をはさ

求 馬 弱虫の侍るが

采 女 仕舞にハ襪襪

頼 母 一寸男もよく

道 心 得て役に立つ人

存候尚又位牌之儀者當七月諸精

靈方同道にて罷越何角ト尊靈可

申述先者御坊如此候

○幽靈を指止に遣す文

閻魔様倍不相替御顔色御六箇敷

被爲入恐悸地獄に奉存候先月相

果候下拙方亡者隨分死際宜敷候

處如何心得候哉此節幽靈一罷出

甚迷惑仕候何卒鬼様御年回被下

死人愛敬第一之儀に付何分致成

佛候様御持戒被仰聞可被下候依

之 大般若經御札一枚指送宜敷御

取計可被下候

○同返事

鬼札披見貴娑婆方幽靈之儀御申

越亡者執念相糺候處寒空一向ハ

經帷子一枚にて唯裏欲き趣申居

外に何之儀も無之候間得道爲申

男女合性

男 無性又使ふ金

女 やたらに取る金

右 始よし後わるし男の

氣度々變るべし歌に

惚れた氣又見て此方

ハ酉の町其暮からの

馴染あるらん

男 ぞろたぼうの土

女 われかねの金

右 始終わるし口舌こと

龍王様鱒々御鮫鱧被成御鱒湯出

絶す女の慎みてよし

歌に

何事も持垢附た夜着

布團寝ても覺てもア

嫌事

男 殺して使ふ金

女 水くさい水

右何事を爲ても目に立

す万儘ならぬ事多し

歌に

上からの見えぬ心の

匂をバ嗅バ濁つた水

腐れ縁

男 さつぱりとした水

女 のぼせあがる火

右男女の中よしとされ共

折々口説あり慎むべし

歌に

一寸とした事から思

ひ染め浴衣七屋へ遣

ハ二朱の通用

男 とりあげぬ木

女 むしんを云ふ木

右男女の中陸じけれ共

隔ありて住所分れく

よさるべし歌よ

儘ならぬ儘は斯して

口説ども儘にする氣

か挨拶もあし

鮪奉存候鯉亦下拙方船今日出帆

仕候間船中無鱈魚無塩一渡海仕

候様御守可被下候右御鱈み申上

候河豚

總て出船之時の必此手紙を龍宮へ出し給へ船中無

事ある事請合あり

○同乙姫病氣見舞の文

以手蟹藻魚し上候然者乙姫様御

病氣之由烏賊が御座候哉龜甲不

存王餘魚是御無鯖仕候段御用捨

可被下候且海上之干鱈一候得共

此鮪奉鮭上候寔に御病中御赤貝

之印馬刀に御坐候

○狸々へ頼文

大酒之節に候得共被成御描御隔

蓋に可被成御上呑度奉存候扣者

此樽當地爛鍋屋銚子郎と申仁小

間物舗出し候は付徳利方爲呑廻

其御地へ罷古酒申候此者醉倒飲

倒にても無之候間屹度御間可仕

毛頭下蓋ハ致申間敷候何卒御引

請爲御呑可被下候先者右御樽み

男 かすり取る木  
女 身揚りする金

右随分中よけれども身の詰りが主人あまの手の前めしく辛苦すべし

歌よ  
身揚りをすれバ其身の三下り上り下りの時の相場ぞ

男 惚られる木  
女 いやあ木

右萬こころよまかせず能く信心してと末のむつかし歌よ  
隔ある障子一重の床

の上よ何時一人でけろりかんちう

男 おこる火  
女 無性よ向る水

右始めよし後わるし九郎助稻荷を信心してよし歌に

お揚りも夕四垂かけてかみかられこけに  
駿河のふじき物いり

男 どうでも宜い木  
女 助てやる金  
右始めより宜しされ共末に身の上の詰りある事あり信心怠るべから

旁早々一升

○同返事

段々御酌酊之五升被下却而滴入  
委細致焼酎候銚子耶殿儀下拙引

受御相手に致候上ハ横合より一寸御改手許杯と申者無之候條酢

古酒も御願酒被成間敷候先者右御返杯如此御坐候

○化物へ遣す文

打續微雨よて御互ふ啞淋敷奉存候依之兵共打寄百物語相催申候

何卒被仰合丑三頃より轆轤おが

ら見越被下候様御狸申入候

○狐入官位を賀す文

一正申入候狐度子狐様御事正一位よ御昇進之由私方へも馬糞一

重御祝被下誠に以御狐千喜之段誤入早速其手は給間敷仇穢奉存

候依之赤之飯一杯豆腐一挺相供申候猶期狐回之節候

○神誘に逢たる人へ遣す文

今度御自慢様御事爲御飛行大山

す歌よ  
 遣手衆や若い衆の眼  
 を忍ひ駒アノトシ  
 ヤンと末の約束  
 男 われ鍋の金  
 女 とぢ蓋の木  
 右始め悪し後あるし始  
 終九而菩薩を祈りてよ  
 し歌に  
 御信心さされ其身の  
 徳若に御満足でり往  
 ぬ世の中  
 夢獨斷判  
 股を天狗に蹴られたと

天狗様に御奉公之由鼻高以太平  
 之至に御坐候乍然日光御便も無  
 之拙者も筑波より御馴染之儀如  
 何と慢心不仕候處此間石尊參之  
 人へ小天狗ン被下致承知候裁着  
 御歸之上可得我意猶期重便之兜  
 巾候  
 ○七福神へ呈す文  
 福神様方被遊御揃御莞爾索笑可  
 被遊御晒可笑奉存候且當年も不  
 相俵私方へ御蓬萊被下金銀萬と

見れば  
 勝負事杯にまたまけ  
 ると知るべし  
 玩弄物の假面の剣ると  
 見れば  
 職工杯休業日と雖も  
 やすめんと知るべし  
 大い折と小い折と重ね  
 て菓子に六誥たど見れ  
 上下折合てむつかし  
 と知るべし  
 役に立たぬ鉄が川の中  
 に捨てあると見れば  
 古いくはみづと知る

御授被下度奉拜上候誠に毎度御  
 寶珠之段御鍵を以七寶八方あつ  
 ち小槌之都合宜敷此丁子に候得  
 者忽箋上萬福よ可相成鯛慶仕候  
 仍之御神酒十二文御備七文奉棚  
 へ上候可然御守可被下候  
 ○同返事  
 布袋寧之御狀毘沙爲令承知候隨  
 分大黒上之身代に致遣し可申候  
 依而福祿之通貨物品々壽老不死  
 之仙藥相送申候誠に千秋辨天目

俄雨よづふ濡れで歩行

と見れバ

人又無心合力を頼み

てもかささいと知る

べし

女房の植た園が黄色に

あつて仕舞たと見れバ

撥擧杯にハかれてつ

まらんと知るべし

芥の中ハ鱈の切身を買

て來ると見れバ

いつもたらざると知

るべし

切手を貼らずハ郵便を

出度來陽御意惠比壽早々金銀

○鼠の嫁入を賀す文

今晚鼠子様御事御鼠鳴言御整之

由誠に以膳家具椀器鼠鳴々々飯

櫃喫奉損候依之廿日計に候得共

鯉節一缺奉引上候聊御鼠鳴義之

印迄に御座候

○六十之蕙破を賀す文

御腎居様御事今晚六十之蕙御破

被成候由寔に以腎張高名御鼻に

顯れ御丈夫之御儀御羨敷奉存候

右に付尾籠之至候得共水風呂桶

にて洗ひ候牛房一把寒玉子一箱

淫亂之仕候御笑納可被下候

○同返事

御塵紙被下早速鼻拵申候且拙者

蕙破御笑被下誠に御耻敷只々提

灯にて餅を搗内祝仕候迄ハ候處

兩種送雞卵牛房志之段早速勢分

附可申と別而悴共之大悦忝奉存

候先者右門口にて御禮申計ハ御

坐候

出したと見れバ  
願事杯先へ届かぬと  
知るべし  
佛様のお椀で大根の葉  
の汁を食へたと見れバ  
喧嘩杯にかあわんで  
はじることありと知  
るべし  
顔へ鞠を打つけられた  
と見れバ  
食逃げおとしてつら  
まりど知るべし  
藏の内に鹿が寐て居る  
と見れバ  
今年ハくらしかねる

ど知るへし  
大根と菜の汁を貰ひ大  
根ばかり食たを見れば  
大切を取つて名を殘  
す吉兆ど知るべし

女禮式

劍突の喰ひ様  
先つ劍突を喰ふに其  
貴人又ハ主人等の前  
恭しく兩手を着き扱目  
を白黒くしあがら其  
人の顔を見詰り居り殘  
らず劍突の濟みたる時  
静に後退りしあから次

の間へ引下り障子越に  
べらりと舌を出すあり  
屁の放り様  
甘藷又ハ持れ易きもの  
を澤山喰込み貴人の前  
杯へ出急し屁の催しあ  
る時は腫の丸きところ  
を尻に確と當て力の有  
らん限り押付け時々之  
を捻り付る様に心掛け  
氣を緩すべからず其内  
屁の氣の漸退さし時腫  
をやりくと緩めるあ  
り此の如く二度三度と  
堪える時屁の氣益々

○月夜に釜を拔れし人へ遣す文

藥之節候得共愈御竈無之荒神  
之至に御坐候然者貴様御事豫而  
野呂馬に候故月夜に釜御拔れ之  
由承知茶釜つり申候乍火箸鍋敷  
之儀御釜ひも被成間敷候得共當  
分御不自由抄子入申候右御見舞  
角之五徳に御坐候  
○鷹に油揚櫻れし方へ遣す  
文

○四國を廻りて猿と成たる人へ遣す文

猿松様御事今朝鷹に油揚を御奪  
れ被成候由定て控侘茫然として  
被爲在候御儀と奉察誠に以御間  
拔之御性質顯れ憂てく奉存候依  
之新道豆腐屋之通帳壹冊爲書差  
上申候右御見舞早々鷹  
○四國を廻りて猿と成たる  
人へ遣す文  
佐次兵衛様御事猿と御成被成候  
て四國より御歸之由乍猿御猿  
之所無恙小猿被成誠に以お猿の



激動して来て四度目位  
 よハ殆ど腫の力及ばぬ  
 程の勢ひにて押し来る  
 ものあり其時兩方の腫  
 を充分放ち去り又尻を  
 も充分揚げ思ひ切て放  
 り出し是を同時に一ト  
 調子聲を張上げて話を仕  
 出し粉らかすべし其割  
 りよは音のせぬものあ  
 り若しあまじいに之を  
 押へんとする時は唐人  
 笛の如き音を發し却て  
 聞苦しきものあり  
 借金の斷り様

目出度奉存候叫速御見回可申處  
 雨天故道惡俵轉も可仕哉と差扣  
 申候何卒序一日和を御覽可被下  
 候天氣次第乍野良回御見廻可申  
 候  
 ○鬼之留守は洗濯物を頼遣  
 す文  
 鬼様御留主之由鬼卒洗濯物御頼  
 申度候尤糊は強く被成可被下童  
 子格子之袷八ッ口裂け牛鬼鍵裂  
 有之候故御塞可被下候鬼葛の紋

凡人より金を借り返済  
 期限の迫る時殿しき催  
 促人よ出達ふての中々  
 尋帯の云譯や出来合の  
 へんチャラ杯にて追ひ  
 返せるものにあらずし  
 て兎角云詰められ立場  
 を失ひまごくするも  
 のあり故に人の女房と  
 あるものは豫てよく其  
 手續を心得置くを肝要  
 とす扱其返金の斷り様  
 ハ諸家の流儀に依り種  
 々ありと雖も我流儀の  
 奥の手とするハ催促人

附候方ハ地獄張に御遣し可被下  
 勿論鬼様御歸被成候は、打殺御  
 吞可被成候間早く鬼がひ申入候  
 ○借金を質し置文  
 當暮指支候し付借金うんと脊負  
 せ指遣し申候何卒質物し御取可  
 成下候乍然此節之事故利ハ高く  
 候ても不苦候間何程にても其方  
 より御拂可被下候尤古借よては  
 無之此間拵候借金し付随分直打  
 ハ可有之乍去請戻候儀ハ毛頭無

に早く死んで見ずるあり其手續は例の催促人が来るべしと思ふ其時間の少し前、蒲團を取出し亭主を赤裸にして寐かし其上へ褌浴衣を一枚覆ひ屏風を逆さま立て圍ひ枕元には子供の手習机を居へ有合の炮烙へ灰を盛り線香を立て茶碗に水を入れ臺所の灰俵の垣物の櫛の葉を一枚取て之を浮かせ置き扱その序に茶碗の水をたつぶり目に

之急度相流し可申候間其御心得にて御貸可被下候  
 ○木に餅の生たるを祝文承候得ハ貴殿御庭之木に餅生候由年來餅おれことと御雛子被成候御丹精顯れ誠に以御身上御持上被成候御瑞相賑々御兩親様尻餅を搗て御怡可被成賃餅之至に御座候依之蒸籠一荷奉蒸上候右御祝人頼まてに御坐候  
 ○手形證文之部

○高野六十那智八十男妾請狀

塗り付け女房の打臥て居るあり催促人の入來る時徐々首を持ち上げメソソ泣ながら宿の今朝程と云ひ掛け又メソソ泣き俄病死の旨を述べ貴方には此間中の御返金も致さず申訣もなき折柄宿の不幸夫は是非なき事と諦ても此節柄いつまでも斯うしても置けず又取片付るとして何事も先立つものハ皆金錢故えか氣

一此何右衛門と申者當何年六十  
 八歳に罷成候我等尻持を以貴殿  
 方へ若衆妾に指出申處一生也御  
 給金之儀ハ一月寺參賽錢二百  
 文宛可被下御相對御仕着之儀は  
 夏晒の越中禪一筋冬紙子袖無羽  
 織一枚可被下御約束にて御坐候  
 若此者痔持に相成候歟又ハ老衰  
 致候はハ早速孫子共に爲引取可

の毒様あがら又一時の御願通を願ひたいと存じ只今貴方へ出やうとした處ト逆捻に云掛れば何ぞ殿しい催促人でも是は飛んた處へ來合せたと思ひ且は斯ん者に又後を貸してハそれこそ大變とソコノに悔みを云置て去るを合圖に早速亭主を叩き起して逃げ出す支度を爲すべし

諸病心得

○風邪氣の者は旅行を爲す可らず鼻風道中がある者か  
 ○中氣と疝氣を病む者の神社は賽する共益あり詩に中氣疝氣是神の届ぬ所とあり  
 ○吐瀉の時には牡丹餅を食ふべし吐た口へ牡丹餅  
 ○血の道の蛇を煎じて飲わが宜し血の道の蛇  
 ○淋病ハ藥より何より商賣身を入れハ直に治するありかせぐよ

申候尤此者棺桶へ片足踏込罷在厄介者に付脇より指搦候者無之候若左様之者有之候得は早速爲引取貴殿へ少も尻宮持付申間敷仍而請狀如件

○上戸宗寺請

底拔町三升目

たんば屋德利郎  
 女房 あい  
 娘 ちやく  
 同 つぎ

醉たり

此者共代々上戸新酒よて拙僧單甫に紛無御坐喰倒盜賊酒にても無之候若脇より手元杯と申もの有之候ハ、五升樽組中之者罷出屹度吞明可申候酔て卷舌如管

○極樂蓮臺の店受

一此何助と申者死際より能存知慥成亡者に付我等受人ハ相立其許池面蓮の葉一枚借受申處佛性也右蓮臺借賃之儀者祥月命日限

追附く淋病なし

○疣うぶの爪つめを切れハ直なる疣うぶの爪つめハ邪よこしまの邪よこしま

摩ま

○癖くせを病びょうむ者は上野かみか

淺草あさくさに居ゐる人ひと力ちから車くるまに附つ

いて馳は廻まわるべし癖くせハ公こう

園うゑんの車くるまに隨したがふ

○咬か逆さかは尤もつとも大切たいせつの病びょう

氣き故ゆゑ油あぶら斷ことせず養生やうじやうすべ

し咳せきてハ事ことを仕損しそんする

の戒いましめあり

○産さん氣け附つたる婦むすめハ室むろ

咲さの花はなを水みづにて飲のす可べ

し早梅はやばい

急きゆう度ど勘かん定てい可か申ま候う

一ひと如ごと來ら様さまより被か仰おほ出だ候う邪よこしま淫いん妄まが語ご

之これ儀ぎ者もの不な及およ申ま精せい進しん潔けつ齋さい急きゆう度ど爲な相さう

守まも可べ申ま候う

一ひと宗しゆ旨しハ代た々た何なに宗しゆハ紛まが無な之これ即すなは寺てら

請まが状じやうハ婆ば婆ばに取と置お申ま候う

右みぎ之これ外ほか如ごと何なに様さま之これ六むヶが敷し儀ぎハても

出だ來ら仕し候う節ふしハ幽ゆう靈れい之これ儀ぎに付つちや

つと消けさせ少すくも貴き殿たへ御ご難なん相さう懸けん

申ま間ま敷し候う爲な後ご生せい如ごと件けん

○風かぜの神かみ送ま手て形かたち

一ひと風かぜの神かみ 壹ひと袋ふくろ

右みぎ之これ通と吹ふ送ま申ま候う尤もつと此この節ふし當あた地ち振ふ出だ

候う間ま西にしの海うみ着き之これ上うへ御ご改あら御ご引ひ取と可べ

被か下くだ候う別わかハうんすん水みづ鼻はなハみ付つ

差さ進しんし候う間ま何なに分ぶん爲な御ご流りゅう行ぎやう可べ被か下くだ

候う

候う間ま西にしの海うみ着き之これ上うへ御ご改あら御ご引ひ取と可べ

被か下くだ候う別わかハうんすん水みづ鼻はなハみ付つ

差さ進しんし候う間ま何なに分ぶん爲な御ご流りゅう行ぎやう可べ被か下くだ

候う

候う間ま西にしの海うみ着き之これ上うへ御ご改あら御ご引ひ取と可べ

被か下くだ候う別わかハうんすん水みづ鼻はなハみ付つ

差さ進しんし候う間ま何なに分ぶん爲な御ご流りゅう行ぎやう可べ被か下くだ

候う

候う間ま西にしの海うみ着き之これ上うへ御ご改あら御ご引ひ取と可べ

被か下くだ候う別わかハうんすん水みづ鼻はなハみ付つ

差さ進しんし候う間ま何なに分ぶん爲な御ご流りゅう行ぎやう可べ被か下くだ

候う

候う間ま西にしの海うみ着き之これ上うへ御ご改あら御ご引ひ取と可べ

被か下くだ候う別わかハうんすん水みづ鼻はなハみ付つ

差さ進しんし候う間ま何なに分ぶん爲な御ご流りゅう行ぎやう可べ被か下くだ

候う

●洒落用文章終

明治廿六年四月十日印刷  
明治廿六年四月十四日出版

版權



編輯者兼  
發行者

日本橋區菱町二番地

加藤福次郎

印刷者

日本橋區新和泉町一番地

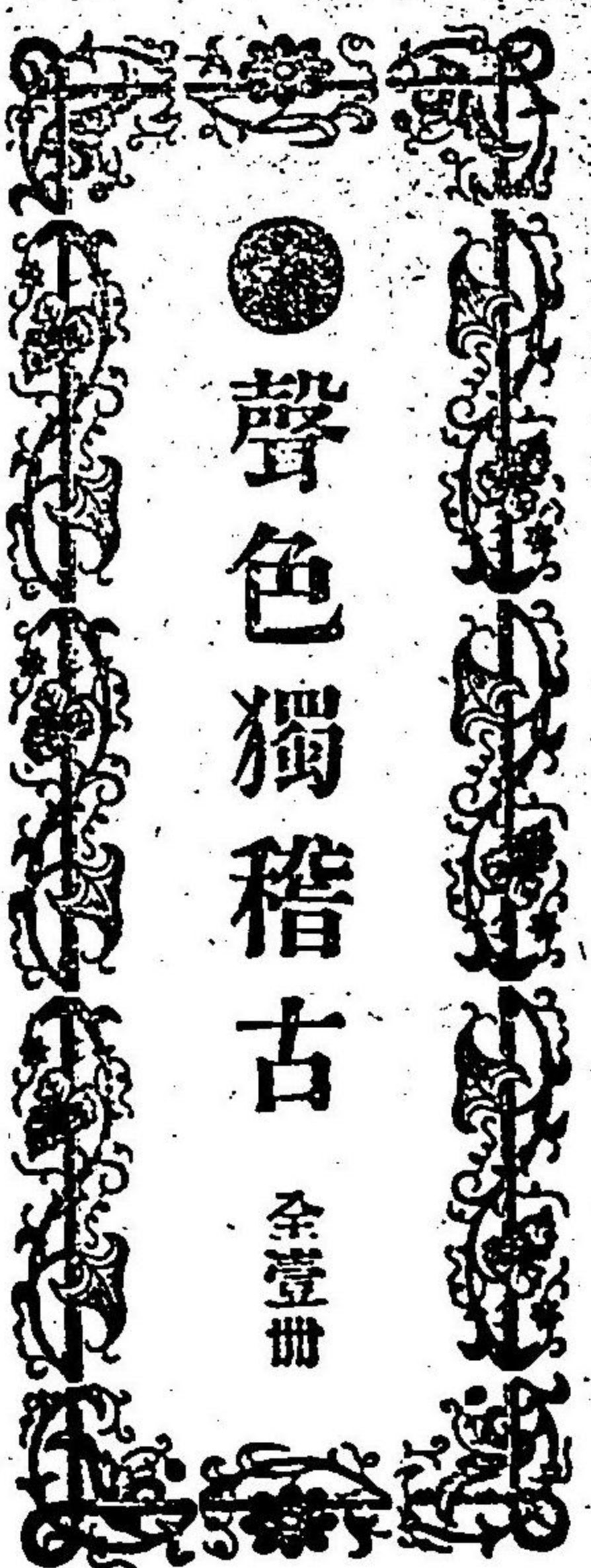
瀧川三代太郎

發兌

日本橋區通四丁目四番地

三井新次郎

道樂全書の内



● 聲色獨稽古

全壹冊

定價金六錢

郵税金二錢

粹き端唄や三下り歌ふ調子にツイ浮かされて踊る座敷の酒宴も唄ひ過れば飽が来る其寸法を付込んで上調子をバ借り受けて高尙い處へ成田屋から粹き音羽屋高島や何か一枚道ひさば寂た座敷もいつしかに元の陽氣を挽回す是れ聲色の功能あり本書ハ其愛敬の親玉たる聲色が獨りで覺へられると云ふ尤も面白き冊子あり「何と皆様安い物でハ御座らぬかし」ボンカチ〜〜〜

三遊。柳。兩派連中著

古今 流行 音曲惣まくり 全一冊 刻既成 定價 金五 錢

右の元禄年間より當時盛んに行はるゝ流行唄迄一ツも不洩集録せるものよて一たび  
緋けに能くアリーヨロツのおん手々をあやせし竟は別類を辨する御定連方の虎の  
巻なり

花柳 内幕 都々一もの話 全一冊 刻既成 定價 金五 錢

此書は有名なる著作者の手よなれる花柳社會の内幕を飽く穿ちたる書よして且一章  
毎に都々一、川柳、狂歌等有名なる藝妓の作を付したるなれば一讀花柳情態了然  
たるそんじよそれ者の龍の巻とやいふしをよ目ある通人の讀め……又ツ、野夫  
み緋け……

酒落指南所 全壹冊 刻既成 定價 金五 錢

本書は看板は偽りなく誠は酒落指南所あり酒落と云ふ者愛嬌の固りにて陰に沈んで  
彼チ是ナと首を捻り南瓜は手裏劍で御座敷でも何か一洒落洒落付ければ座中忽ち笑  
いを催ふし四角を話しも丸く納まる是が則ち洒落の徳笑つて暮すも怒つて暮すも一  
生の一生ありさあ〜皆様酒落指南所を買て御笑ひささい笑う門にハ福の神が舞込  
みやす

新撰考物集 金壹冊 定價 金六 錢

本書は知識の倉庫とも云ふべき者にして新視新題ある面白き者のみを集められたれば是  
迄在ふれたる類よあらず請ふ大方の諸君速に愛覽を賜へ

●影芝居鸚鵡人擬

全壹冊 刻既成 定價金六錢

本書の當時有名なる俳優諸子の聲色を記載し、稽顙より芝居道有益ある事ども、澤山揚載せし者、又して尤も面白き冊子あり、抑も聲色の徳と云つば、愛敬ありて世辭、又當心浮たぐの御座敷、又て調子外れの濁聲を擧げ、藝者封間を困らせんより一寸と御手輕あ合方を借り、誑い處を一枚遣つて御覽じら、忽ちヤンヤと喝采を博する疑ひ、あし是か即ち聲色の徳偽言と思へ、一冊買つて遣つて見給へ

●口上茶番三題話

全壹冊

定價金六錢

本書の酒席の餘興等、尤も適當ある茶番三題話を蒐集せし者、又して一讀して遊たり、粹たる事容易なり、實に花柳社會の虎の巻とも謂つべし、請ふ愛讀を給へ

